

◆ 第一次大極殿院地区の調査

— 第295次・第296次

1. はじめに

第一次大極殿院地区の発掘はすでに東半分をほぼ終了し、第一次大極殿も第69次（1970）・第72次北（1971）調査で東3/4を検出しており、これらの成果は『平城報告XI』（1981）でまとめている。一方、西面築地回廊部分は第192次（1988）・第217次（1990）調査で一部を発掘したが、詳しい様相はあきらかとなっていない。

このようなことから、第295次調査は第一次大極殿の全容と大極殿から西面築地回廊に至る部分の様相を、第296次調査は西面築地回廊の南西隅の様相を解明することを目的としておこなった（図2）。ところで、第一次大極殿院地区の遺構変遷は『平城報告XI』では、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと大きく3期に分け、Ⅰ期をさらにⅠ-1～4の4小期に細分化する。すなわちⅠ-1期は、第一次大極殿・後殿・築

地回廊などを造営した時期〔和銅3年（710）～〕、Ⅰ-2期は、閣門両脇に楼閣を建て、大極殿院南に朝堂とそれを囲む掘立柱塀が建つ時期〔神亀・天平初年～〕、Ⅰ-3期は、恭仁京遷都で大極殿と東西築地回廊を撤去し、掘立柱塀で区画する時期〔天平12年（740）～〕、Ⅰ-4期は、平城京遷都で東西築地回廊を再建し、基壇を貫く暗渠をつくりなおす時期〔天平17年（745）～〕、Ⅱ期は、南面・北面の築地回廊を内側に寄せ、内部の北半に掘立柱建物が林立する時期〔天平勝宝5年（753）～〕、Ⅲ期は、平城上皇が西宮を造る時期〔大同4年（809）～〕である。

そこで本稿では、まず第295・296次調査それぞれで、遺構の詳細と変遷、『平城報告XI』の時期区分との関係、新知見と考察を説明し、最後に両次を包括した第一次大極殿院地区の問題点を述べる。

2. 第295次発掘調査

第295次調査区は、東区・中区・西区の3つに分け（全体で2695㎡）、東区（東西34m×南北50m）では第一次大極殿の未発掘部分（既発掘部を含めた西1/3）を発掘し、遺構の全貌を解明するとともに、中区（東西40m×南北10.5m）では大極殿から西面回廊までの敷地造成を、西区（東西25m×南北22m）では西面築地回廊周辺の様相をあきらかにすることを目的とした。

今回の調査で検出した主な遺構は再検出も含め、礎石建ち建物1、掘立柱建物21、足場穴8、築地回廊2、築地塀1、掘立柱塀9、溝16、土坑1、バラス敷き2である。遺構は切り合い関係や建物配置より、大別してA～Gの7時期、さらにAとBは大極殿基壇と仮設建物の変化に基づきA1、A2、B1、B2に細分する。

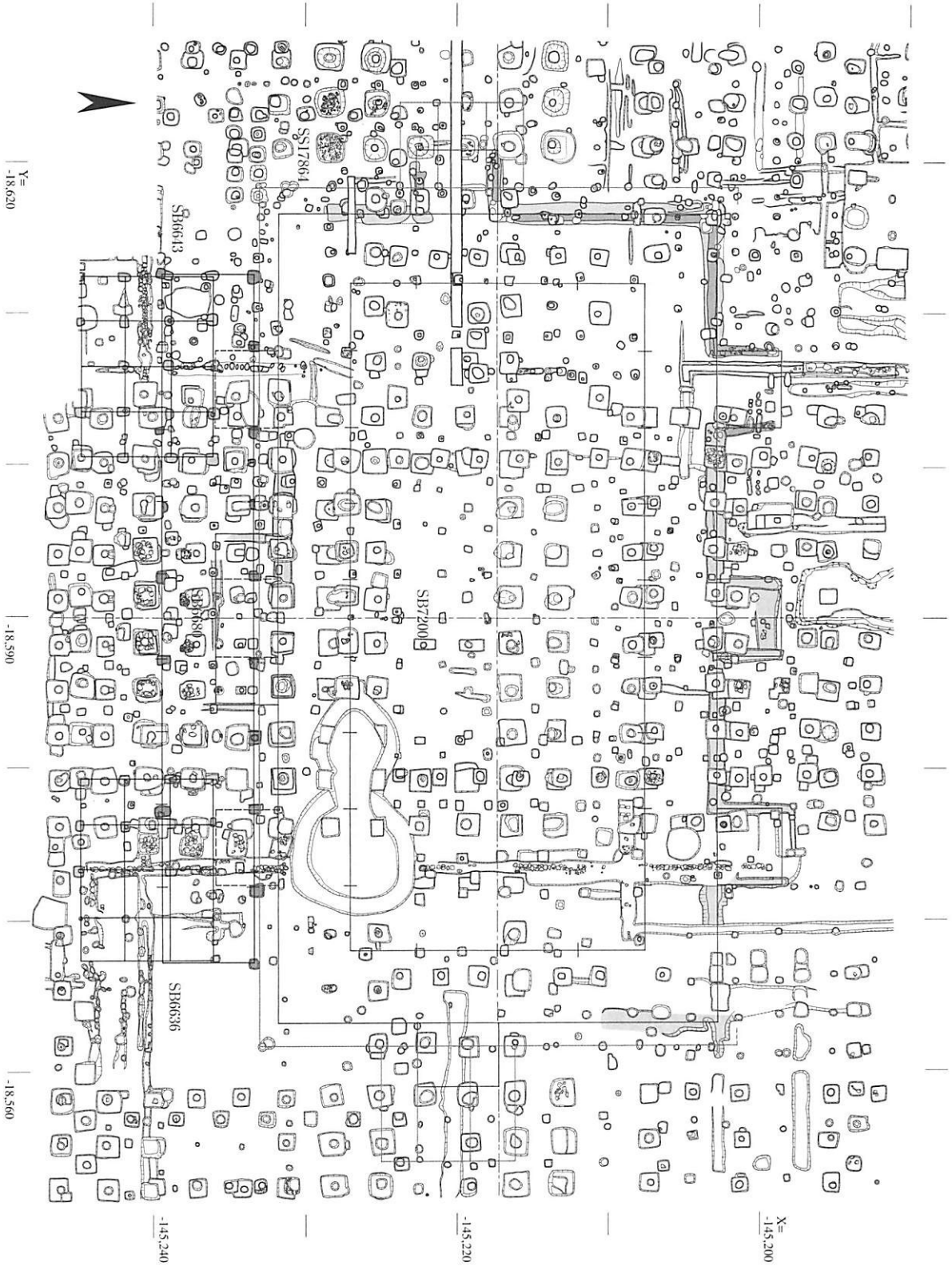
発掘前の状況と基本層序

発掘前の調査区の地形は、北東より北西に向かってゆるやかに下がっており、西区西端から約8mのところは



図2 第295・296次調査位置図 1:5000

图3 第一次大極殿遺構平面图 1:400



西に1.5mほど下がる大きな段差があった。

東区の基本的な層序は、上から整備粗砂、耕土、床土、褐灰砂質土（遺物包含層）、バラス・黄色土ブロック混茶褐粘質土（整地土）、バラス混硬質茶褐砂質土および軟質明褐砂質土（地山）となる。遺構は整地土および地山の上面で検出した。

中区は、Y=-18,643.0付近で後世の耕地化にともなう約50cm西に下がる段差があり、段差を境に基本層序と検出面で大きな違いがある。すなわち、段差以东は東区と同様だが、段差以西では、地山はY=-18,651.0付近で西に急激に下がり、地山上面は褐色砂礫粘土の厚い整地土がおおい、さらに西端部では上下2層のバラス整地がのる。遺構はおもに整地土と上層バラスの上面で検出した。

西区は、東辺部および中央部における層序として、上より耕土、床土、バラス混じり暗灰褐シルト（遺物包含層）があり、その下で奈良時代の遺構である上層バラスSX17866と下層バラスSX17865および築地基壇土（黄橙白粘質土）を検出した。西区西辺部の段差以西における層序は、上から耕土、床土、黄褐・灰褐シルトであったが、奈良時代の遺構は削平されてまったく残っておらず、シルト層上面で中世以降の遺構のみを検出した。

以下、各時期のおもな遺構を説明する。なお、SB6605、SB7164、SB6620、SB7170、SB6611、SB7150、SB7151A、SB7151B、SB7152については既発掘部分ですでに全掘した遺構で、今回の調査結果で遺構解釈は変わらなかったことから、本稿では説明を割愛する。

検出した主な遺構

A期の遺構

SB7200・SB6680・SS17864 第一次大極殿SB7200は7間×2間の身舎に四面庇が付く基壇付礎石建ち、東西棟建物で、第69・72次北調査同様、地覆石据付掘形を北面

で東西約17m分、西面で南北約23m分検出した。基壇北西隅は検出したが、南西隅から北1/3ほどと南面は削平されており検出できなかった（図3）。

今回の成果としては、まず未発掘部分全面で据付掘形、抜取痕跡を明確に区別して検出したこと、西面階段・北面西階段の遺構を検出したことが挙げられる。

据付掘形は幅130~160cm、外側が浅く（深さ0~5cm）内側が深い（深さ15~20cm）2段掘りで、埋土は遺物をほとんど含まない茶灰褐砂質土であった。抜取痕跡は幅40~50cm、深さ10~15cm、据付掘形の深く掘り下がった部分の中央にあり壁がほぼ垂直に上がる。埋土は凝灰岩や瓦片などを含む黄灰褐砂質土である（図6）。北面西階段の抜取痕跡から出土した凝灰岩片は、分析の結果、「流紋岩質溶結凝灰岩（いわゆる竜山石）」と「流紋岩質凝灰角礫岩（二上層群ドンゾルボウ累層産出）」の2種類であることがわかった（図4）。

北面西階段と西面階段は地覆石痕跡の折れ曲がりから確認した。北面西階段は建物の西から2間目に対応し、抜取痕跡のみ検出した。階段幅は地覆石の心々寸法で17尺、出は14尺となる。西面階段は南から2間目に対応し、据付掘形・抜取痕跡を検出した。階段幅は抜取痕跡の心々寸法で18尺、出は14尺である。南面西階段は検出できなかった。

大極殿の基壇規模は、地覆石痕跡の北西隅を検出したことから、東西181尺×南北98尺と確定した。（なお、基準尺は1尺=0.2954mと推定。）建物規模は、階段地覆石の心を建物の柱心と合わせているという前提にたてば、今回の調査で桁行・梁間の階段と柱の位置がすべて把握できたことから、東西149尺×南北66尺と推測できる。

また、SS17864は大極殿基壇地覆石の据付掘形より約5尺離れた位置で検出した小穴列で、足場穴とみられる。基壇の西面で24基、南面で4基検出したが、西面では2回

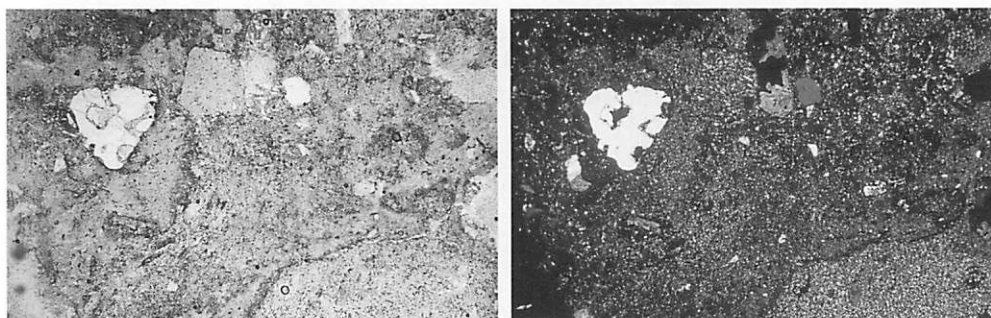


図4
第一次大極殿SB7200地覆石
（流紋岩質溶結凝灰岩）
偏光顕微鏡写真 約12.5倍
左: -ニコル 右: +ニコル

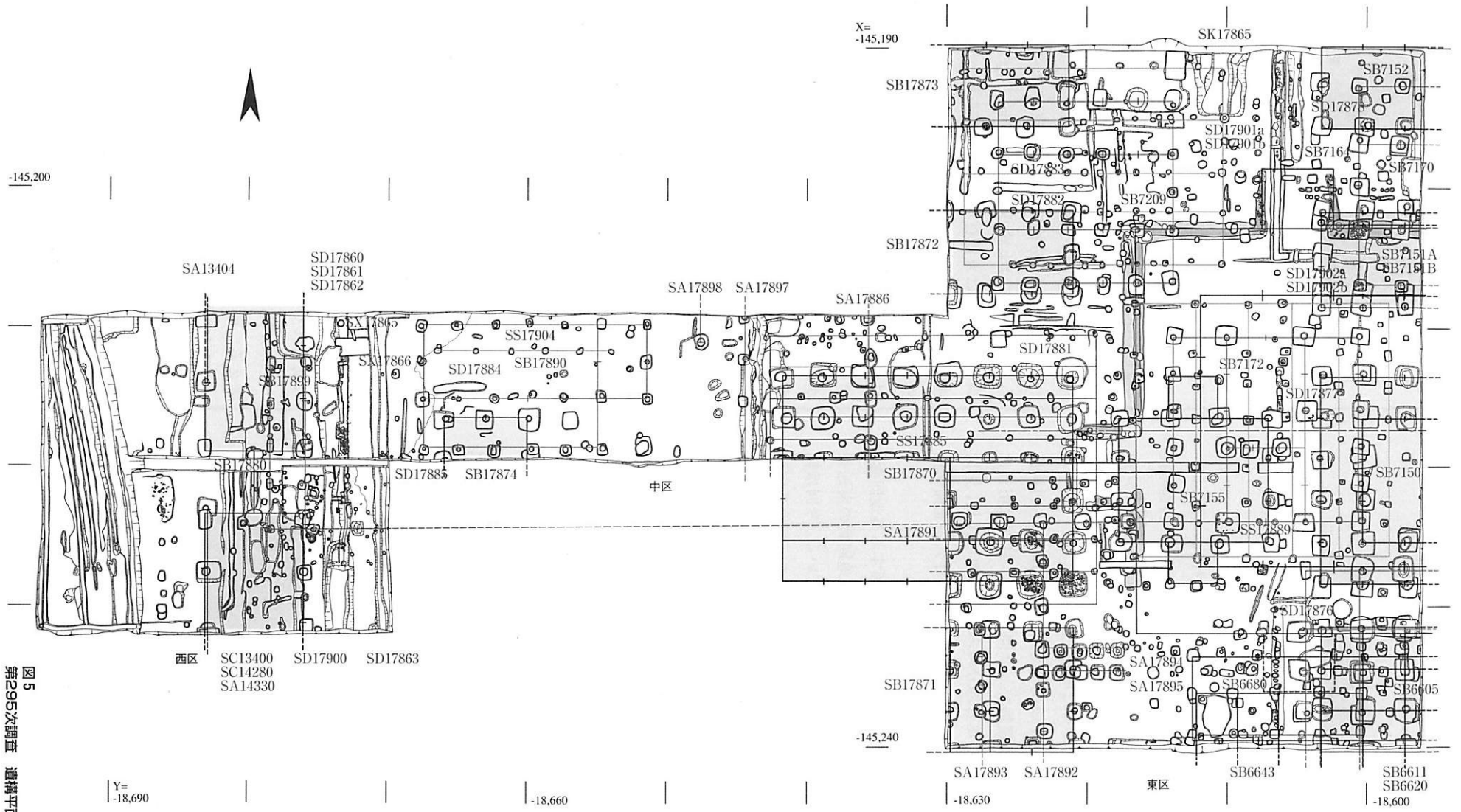


図5
第295次調査 遺構平面図 1:400

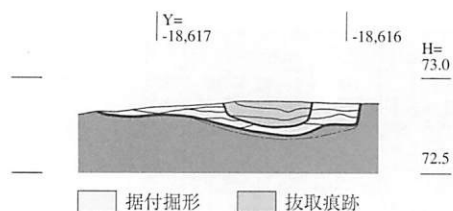


図6 第一次大極殿SB7200地覆石痕跡
断面図 (X=-145,209.6) 1:40

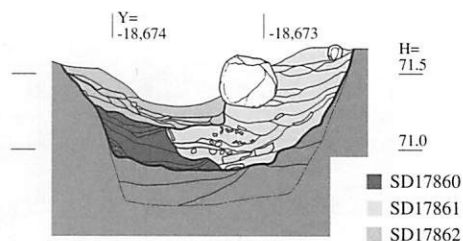


図7 西面築地回廊東雨落溝 SD17860・SD17861・SD17862
断面図 (X=-145,227.2) 1:50

分ある。柱間は7尺～11尺と不規則で、柱穴の径は40～50cm、地山面を40cmほど掘り込む程度で浅い。西面階段を囲むように東西20尺・南北36尺ほど突出した部分がある。性格は特定できないが、ここに足場の踊り場もしくは足場に登る階段があった可能性がある。

この他に大極殿の南5.5尺の位置に建つSB6680も再検出した。掘立柱東西棟建物で、9間×1間、柱間は桁行は大極殿北面階段折り返し部分のみ19尺で他は16尺、梁間は20尺となるが、今回再検討した結果、柱穴が北面階段折り返し位置と重複することがわかった。

SC13400 第一次大極殿院の西面を画する築地回廊。東面築地回廊SC5500に対応する。西面築地回廊の南延長部は、第192・217・296次調査で発掘している。今回は幅約1.8mの築地基底部を南北23m分検出した。築地基底部は白色粘土や褐色砂質土、黄橙白粘質土を積む版築でつくられており、築地心はおよそY=-18,679.5である。これは第296次調査の推定心より約2m西、第217次調査の推定心より約60cm西にあたり、掘り込み地業も認められなかった。側柱は礎石建ちと思われるが、今回、A期の側柱柱穴は検出できなかった。しかし位置的にはC期のSA13404が西側柱位置を踏襲していると考えられる。築地心よりSA13404の柱心まで12尺、東雨落溝SD17860ま



図8 SD17860・SX17865・SX17866 (北西から)

では20尺。後者より築地規模は幅40尺と推定できるが、基壇化粧はまったく残っていない。

SD17860・SX17865 SD17860は西面築地回廊東雨落溝。X=-145,225.5以北では、底に直径4～5cmの石を敷き、東岸に側石を並べる。側石は直径約10cmの拳大の石を連ねたもので約11m分検出した。下層バラスSX17865の西端も兼ね、D期には上層バラスSX17866に覆われる(図8)。調査区北端では東側石と底石のレベル差が5～6cm、幅は西端が全面的に壊されているので定かでないが、断面観察より60cm内に収まるとみられる。一方、X=-145,225.5以南では素掘りで幅2m弱、深さ80～90cmと大きくなる。第192次調査で検出したSD13401に対応するが、SD13401が奈良時代前半の間存続するのに対し、SD17860は恭仁京遷都前のB期までしか存続せず、遷都の際には壊して素掘り溝SD17861につくりかえている(図7)。SD17860は下層バラスSX17865の西端も兼ね、SX17866に覆われる。

SX17865はSD17860の東に広がるバラス敷き。大極殿創建当初の整地土と考えられる。直径4～5cmのバラスで形成され、SD17860と同様、SX17866に覆われる。

B期の遺構

SB6643 SB7200の南西側にある4間×3間、総柱建の掘立柱東西棟建物。SB7200の南東側のSB6636と一対になる遺構で、第69次調査で一部検出し、4間×4間と推定していたが、今回の発掘で北側1間は検出できず、梁間が3間で、位置も西に1間分ずれることがわかった。

C期の遺構

SA13404 SC13400の西側柱と重なる位置にたつ掘立柱南北塀。一部E期の西面築地回廊SC14280の西側柱柱穴に切られている。柱間は15尺で今回は4間分を検出したが、南から3間目は30尺あり、通路として開けてあったと考える。南から2・3番目の柱穴では柱の礎板に塀を使っており、他の一つは抜取痕跡の底部中央に瓦がつまっていた(図9)。礎板塀は5～6個を2段ずつ積むが、形状からみて、恭仁京遷都の際に壊した塀積擁壁の塀を転用したと考える。第192・217次調査でもSA13404の柱穴で同様の地下地業を確認している。

SD17861・SD17863 SD17861はSD17860を壊してつくった蛇行する素掘り溝。西区南半ではSD17860と同様に

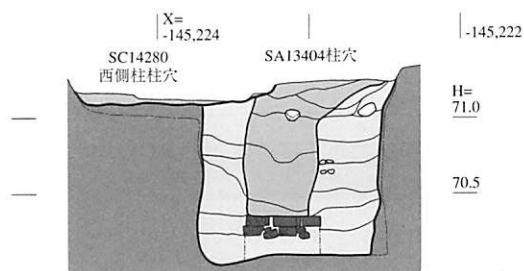


図9 SA13404・SC14280 断面図 (Y=-18,683.0) 1:50

幅広で深くなる。溝底にSA13404の礎板塼と同形状の塼を捨てている。D期のSD17862に切られる。

SD17863はSD17860の7尺東にあり、SX17865を切る素掘りの南北溝。幅約50cmで22m分検出した。

D期の遺構

SC13400・SD17862 平城京遷都後のD期に西面築地回廊SC13400がつくりなおされた。B期の築地回廊基部を踏襲し、SD17862を東雨落溝とする。側柱は礎石建ちと推測するが、礎石掘付掘形や基壇外装などはまったく残っていなかった。

SD17862はSC13400の東雨落溝で、SD17860とSD17861の西岸を破壊する。幅広で浅く素掘りだが、これはF期に破壊された姿であり、最初の姿は不明である。溝の東肩がSX17866の上面と一致するので、SX17866の上面から掘り込んだとすれば、掘削がE期に下る可能性もある。

SX17866 SD17862の東側で中区まで不整形に広がるバラス敷き。SX17865を覆い、SX17865より小振りのバラス(直径約2~3cm)で形成される。E期のSB17874の柱穴に切られており、E期建物を建てる時点では敷かれていたことがわかる。

E期の遺構

SB17870・SS17885 7間×3間の身舎に南北庇が付く掘立柱東西棟建物で、身舎内に間仕切りがある。西脇殿群の中心建物とみられる。柱間は桁行、梁間とも10尺等間。側柱や庇柱は掘形が160~180cm四方で深さも120~130cmと大きく、抜取痕跡は上部が漏斗状で下部は円筒状であった(図10)。遺物は抜取痕跡上部に含まれていたが、特に南側柱の東端2基の抜取痕跡で多量の瓦片と鉄釘が出土した(図11)。また足場穴もSS17885a, bの2回分がみつまっている。

SB7155 桁行3間×梁間1間の身舎の南北中央1間に土庇がつく掘立柱東西棟建物。柱間は桁行12尺等間、梁間10尺等間で、北庇は9尺、南庇は10尺出る。第72次北調査で部分的に発掘し、今回全体を検出した。

SB17871 桁行3間以上×梁間3間の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行、梁間とも10尺等間。第69次調査で検出したSB6655と対応することから桁行5間と推測する。

SB17872・SD17881・SD17882・SS17886・

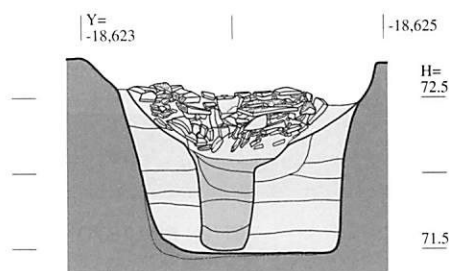


図10 SB17870南庇柱穴 断面図 (X=-145,228.3) 1:50

SB17873・SD17883・SS17887 SB17872とSB17873は3間以上×梁間2間の掘立柱東西棟建物で、東側柱を揃える。ともに柱間は桁行、梁間とも10尺等間で、一部、SB7209の柱穴に切られる。第69・87次北調査で検出したSB6666、SB6669と対応することから、桁行7間と考える。

SB17892に付随して、南側柱より6尺離れた位置で南雨落溝SD17881を東西5.5m、北側柱より6尺離れた位置で北雨落溝SD1882を東西6.5m検出した。またSB17893でも、南側柱より6尺離れた位置で南雨落溝SD17883を東西5.5m、さらに足場穴SS17887も検出した。

SB17874・SD17884・SD17885 桁行1間以上×梁間2間の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行、梁間とも10尺等間で、北端1間分を検出した。調査前は第87次北・南調査で検出したSB8245と対応する遺構であることから、梁間3間の総柱建物と想定していた。しかし今回、東1間分が検出できず、西から2列目の柱穴も妻柱以外検出できなかったことから、SB8245のような梁間3間の総柱建物にはならないことが判明した。

また今回、北側柱から8尺離れた位置で北雨落溝SD17884を東西4m、西側柱から10尺離れた位置で西雨落溝SD17885を南北4.5m検出した。

SK17875 東区北端中央で検出した土坑。東西約3.3m×南北約4.5m以上、ほぼ長方形を呈しており、深いところで約70cmある。土坑内で瓦編年Ⅲ期に属する軒丸瓦6691Aが出土し、土坑上面でF期のSB7209の足場穴がみつまっていることから、E期の遺構と考える。

SD17876・SD17877・SD17878 SD17876、SD17877、



図11 SB17870南東隅柱穴検出状況

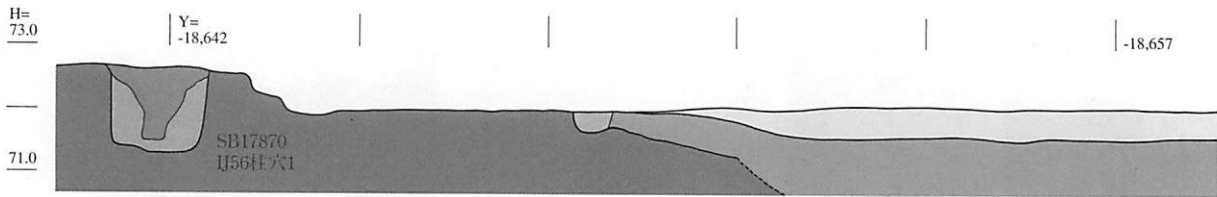


図12 SB17870～SD17860にかけての断面図 (X=-145,219.5) 1:120

SD17878はそれぞれ中央建物群のSB6611、SB7150、SB7152の西雨落溝で、南北にわたって9m、3m、8mを検出した(SD17876の幅は90cm)。それぞれ溝の内部に石の抜取痕跡が重複して連なっているため、本来は一連の石敷雨落溝であったと推測する。

SC14280・SB17880 E期の西面築地回廊SC14280はA期以来の築地基底を踏襲し、1間門SB17880を開く。今回、礎石据付堀形を東側柱で6基、西側柱で2基検出した。築地心から側柱心までは12尺、側柱の柱間はA期よりも狭く、13～14尺であった。柱穴はいずれも深さ約40cmと浅く堀形・抜取を区別できないため、礎石の据付堀形の下部とみられる。

SB17880は築地回廊に開く掘立柱の南北1間門で東面門SB8230に対応する。柱間は15尺で、柱穴2基を検出したが、うち南の柱穴の南東隅・南西隅に直径約30cmの上面の平らな礎石が据えられていた。これは建築的にみると、築地堀の切れ目を押さえる「かいのくち」という板壁を支える柱の礎石と推測できる。さらに柱穴と柱穴の間で敷石の抜取痕跡も検出した。

F期の遺構

SB7172・SS7228・SB7209・SS17889 SB7172は桁行5間×梁間2間の身舎に東西庇が付く掘立柱南北棟建物。柱間は桁行、梁間とも9尺等間だが、庇の出は各13尺となる。第72次調査で一部を検出し、今回全体を検出した。庇の柱穴はすべて検出したにもかかわらず、身舎の柱穴は2基検出ただけである。中央間の東西2基の柱穴は間仕切り壁の柱と考える。また足場穴SS7228も検出した。

SB7209は桁行4間×梁間3間の身舎に南北庇が付く掘立柱東西棟建物。柱間は桁行8.4尺等間、梁間9尺等間、庇の出が各12尺となる。SB7209でもSB7172同様、庇柱はすべて検出しているが、身舎柱で見つからない部分があった。また足場穴SS17889も検出している。

SB17890 桁行5間×梁間2間の身舎に東庇・南庇が付く掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行、梁間ともに9尺等間で、東庇は10尺、南庇は12尺出る。東妻柱は検出していないが、東1間のみ柱間が広いことから東庇が付くと考える。第87次北調査で検出した四面庇の付くSB8224に対応するが、想定位置よりも西に約3mずれ、西庇が付かないことから同規模とはならない。

SA17891・SA17892 SA17891はSB7172の南妻柱列より西にのびる掘立柱東西塀。SA6624に対応する。柱間寸法は10.5尺等間で、今回は4間分を検出した。さらに西にのびて西区のSB17899につながる。

SA17892はSA17891の東から3番目の柱穴から南にのびる掘立柱南北塀。柱間寸法は10尺等間で、今回は5間分を検出したが、さらに調査区外南につづく。

SA17893 掘立柱南北塀。SA17892の西15尺の位置で平行にのびる。柱間寸法は6.5尺等間で、4間分を検出したがさらに調査区外南につづく模様。

SA17894・SA17895 SA17894はSA17892の南から3つめの柱から東にのびる東西掘立柱列。SA17895はSA17894の南5尺離れた位置でそれと平行に並ぶ東西掘立柱列である。柱間寸法はともに4.5尺で各4間分検出した。SB17871の柱穴を切ることで、F期の遺構と考えられるが、柱間寸法が極端に小さく、堀形が類似していることから短期間で作り替えられた一連の塀と推定する。

SA17896・SA17897・SA17898 SA17896は中区で検出した掘立柱南北塀。SB17870の柱穴を切る。今回3間分を検出したが、SA6625と対応することから調査区外の南北につづく模様。柱間寸法は10尺等間。

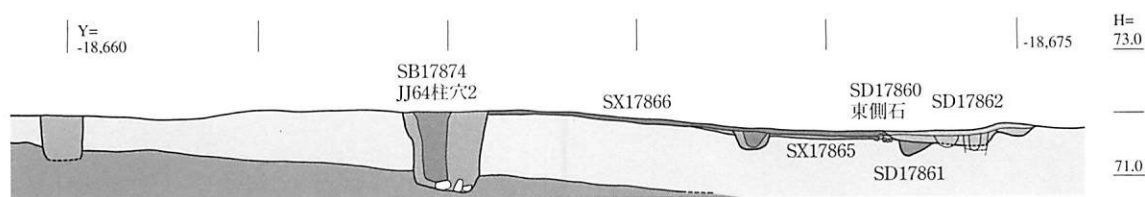
SA17897はSA17896の西30尺の位置でみつかった掘立柱南北塀。柱間寸法は10尺等間で2間分を検出した。SA6629と対応するため、南北に延長するとみられるが、柱穴は非常に浅く、南は削平されて検出できなかった。

SA17898はSA17897の西10尺の位置で検出した掘立柱南北塀。浅い柱穴1基を検出したただけであるが、SA8225と対応することから、調査区外北にのびるとみられる。

SB17899 SB17899はSA14330の東にある1間×4間の掘立柱南北棟建物。西は築地堀、南はSA17891に接していることから、隅に建つ物置小屋のような建物か。

SA14330・SD17900 SA14330は第217次西調査で検出した築地堀。西面築地回廊の基底を踏襲してつくられたと考える。西区南端で幅約80cmの東雨落溝SD17900を南北約7.5m検出し、築地心と溝心との距離は11尺であることから築地堀の規模は22尺と推定できる。

SD17901a・SD17901b 東区北部で検出した南北溝。東区北端より約15m検出したが、さらに北にのびる模様。SD17901aは幅約1m、深さ約40cm、堆積土は軟質灰黄土



である。SD17901bはSD17901aの中央にあり、幅約50cm、深さ約25cm、堆積土は瓦を多く混入する黄褐粘質土で、下部には扁平な石や石の抜取痕跡がある。おそらく前者が暗渠の据付溝で後者が抜取溝であろう。

SD17902a・SD17902b SD17901の南端で折れ東へのびる東西溝。東西8m検出。a,bの分類はSD17901に従う。E期柱穴と切り合うことから、SD17901・SD17902はF期に属することがわかる。

G期の遺構

平安時代以降の遺構は、西区東半部の耕土直下で土器や瓦器を多量に含む暗灰土層があり、この面で遺物を含む小穴や土坑、柱穴などを検出したほか、西区西端で北西から南東に流れる斜行溝を検出した。また東区では遺構面直上で縦横にはしる耕作溝も多数検出した。

遺構変遷

以上のことから、遺構変遷は次のようになる(図13)。

A1期・A2期 A1期は、築地回廊で囲んだ東西178m南北318mの区画の中央北寄りに、大極殿と後殿を建てる時期。この時期の大極殿には、南面に階段を付設していない。大極殿から西面回廊までは中程で地山が急激に西に下がり、バラスの多く混ざる土と粘質土を交互に積んで整地していた。A2期は、大極殿の南面にSB6680を建て、西は東雨落溝SD17860をとまなう西面築地回廊で画する。

B1期・B2期 B1期は、SB6680を壊して大極殿の南面中央に幅38尺、出14尺の石階を取り付ける時期。西面築地回廊の東雨落溝は存続する。B2期は、大極殿の南面階段の両脇にSB6636、SB6643を付設する時期。

C期 恭仁京に遷都する時期。西面築地回廊SC13400を壊して大極殿とともに移築する。その後、築地回廊の西側柱の位置に掘立柱塀SA13404を建て、東雨落溝SD17860を壊して素掘り溝SD17861をつくる。

D期 平城京に遷都する時期。遷都後は、SA13404を壊してSC13400をつくりなおす。またこの時期に、SX17866を整備したと考える。

E期 大極殿を壬生門北方の第二次大極殿院地区に新築し、以前に大極殿があった地には掘立柱建物が林立する時期。高台中央に3棟の主殿、東西に脇殿と数多くの掘立柱建物群を建てた。今回は5棟の西脇殿を検出して

る。一方、A期の築地基底を踏襲した西面築地回廊SC14280には1間門SB17880を開いた。

F期 平城上皇が平城宮に一時住まう時期。E期の主殿と同じ位置に主殿を、その東西に脇殿を配置した。西面築地回廊SC14280は築地塀SA14330につくりかえる。

G期 東区南半部に耕作溝、西区段差下に斜行溝がある。

『平城報告XI』の時期区分との関係

前述のとおり、A1、A2期あわせて『平城報告XI』のI-1期に、B1、B2期あわせてI-2期にあたる。すなわち『平城報告XI』では、大極殿の南面階段を創建当初からの付設と解釈したが、後述の検討の結果、付設前と後に分ける必要性がでてきた。C期は恭仁京に遷都するI-3期、D期は遷都後のI-4期にあたる。西面築地回廊の東雨落溝の変遷観が南延長部の第192・217次西調査の所見と異なる。E期、F期はそれぞれⅡ期、Ⅲ期にあたり、既発掘部分の遺構解釈は特に変更はない。平城上皇期後は特に時代が比定できる遺構はみつからなかった。

遺構の問題点

第一次大極殿SB7200に関する成果の中で、基壇地覆石の据付掘形・抜取痕跡を明確に区別して検出し、基壇の平面規模が確定したこと、痕跡の折れ曲がりから北面西階段と西面階段の位置を確認できたことの意義が大きい。基壇化粧だが、据付掘形は外側が浅く内側が深く下がる2段掘りとなることから、地覆石の外側下面に延石はなかったと考える。一方、抜取痕跡の壁が垂直に上がることから、地覆石は抜取痕跡の中に収まり、幅は1.2~1.3尺程度と推測する。(基準尺は1尺=0.2954m)

南面階段について、『平城報告XI』では、SB6680の桁行柱間が北面階段を南に折り返した位置のみ広いのは、大極殿の階段をさけたためと考え、創建当初には南面階段が3基あると解釈した。しかし今回、南面西階段を検出できなかったことから、既発掘部分も含めた遺構の再検討したところ、北面階段の折り返し位置がSB6680の柱穴に重複することが判明した。南面階段の幅が北面階段の幅より狭くない限り、SB6680と常設の南面階段3基が共存するとは考えがたい。したがって創建当初には大極殿の南面階段はなく、B期に幅38尺の中央階段が1基付設されて完成期をむかえたと考える。

以上から、遺構変遷も『平城報告 XI』とは異なり、恭仁京遷都前のA期とB期でそれぞれ2時期、計4時期に分けた。SB7200の前面に建つSB6680の建設時期は常設の石階がないA2期とするが、柱間が広い部分には仮設の木階などを設置した可能性を考える。

ところで大極殿の足場穴であるが、東面にも今回西面と南面で検出したものと同様の柱列が並ぶ。特に東面階段部分で東に突出した柱穴列がみられ、踊り場の存在が予想できる。また、南面中央階段の内側にも建物としてまとまらない柱穴が東西4基並ぶが、これも足場穴とする。ちなみに北面には足場穴となる柱穴列はみられない。

一方、SB6643だが、『平城報告 XI』では4間×4間の規模としたが、調査の結果、4間×3間の東西棟となった。これを踏まえ、SB6636も再検討したところ、SB6636も同規模で中軸線に対してSB6643と対称となることがわかった。これらが大極殿の南面中央階段をさけるように左右に建てていることから、B期でも大極殿の南面中央階段ができた後のB2期と考える。

また、西面築地回廊SC13400を推定心より約60cm西で検出したことから、大極殿本体の中軸線 $Y=-18,589.9$ と回廊で囲まれる大極殿院の中軸線 $Y=-18,590.4$ に約50cmのずれが生じることが判明した。ちなみに東面門心と西面門心による東西築地回廊の心軸距離は178.18mとなり、基準尺を1尺0.2954mとした場合、約603尺となる。

E期の遺構は、西脇殿とみられるSB17870、SB17871、SB17872、SB17873を東脇殿からの推定位置で検出した。したがって、ほぼ東西脇殿が10尺方眼にのる形で中軸線に関して対称に配置されていた。ただしSB17874は、対応するSB8245とは異なる規模となったため、必ずしもすべての脇殿が対称になるとは限らないことがわかった。

F期の遺構の特徴は、柱穴がE期より全体的に浅く、特殊な建築構法がとられていることなどが挙げられる。特にSB7172やSB7209で、庇の柱穴は検出したのに身舎の柱穴は検出できなかった理由として、次の2つが想定できる。①庇も身舎も掘立だが、身舎部分を盛り土して柱穴を掘り、盛土が削平されて検出できなかった場合、②庇は掘立だが身舎は礎石建ちで、浅い据付掘形は検出できなかった場合である。しかし身舎の柱穴は方形か隅丸方形であり、礎石の据付掘形とは考えにくい。したがってこれらは①の場合が当てはまるであろう。

奈良時代の敷地造成と旧地表面のレベルに関しては、A～D期は後世の削平が激しく、西面築地回廊の東側に2層のバラス敷きがあった程度しかわからない。しかしE・F期の場合は遺構の遺存状況から多少推定できる。

今回、E期の中央建物群の西雨落溝SD17876、SD17877、SD17878を検出した。これらは底石の抜取痕跡しかみつからなかったが、東雨落溝SD6608では底石がかなり残っていた。そこで成20cm程度の側石を1石置いたと仮定した場合、旧地表面のレベルは中央建物群の北端から南端までの南北約50mで、73.25m～72.74mと南に約50cm下がっていたと推定できる。この傾斜は中央建物群と東脇殿群の検出面や柱穴底でも観察された。

一方、西脇殿群では、南北方向の検出面および柱穴底はほぼ水平で東のような傾斜はない。東西方向では、中区の段差に関して、段差東にあるSB17870のIJ56柱穴1と段差西にあるSB17874のIJ64柱穴2の深さはほとんど変わらなかった(図12)。ここでSB17870とSB17874で旧地表面がほぼ水平ならば、IJ64柱穴2は深さが180cm近いことになるが、今回検出したE期の柱穴で深さが140cmを超えるものはなかった。したがって旧地表面はSB17870とSB17874の間でレベル差があったとみられる。

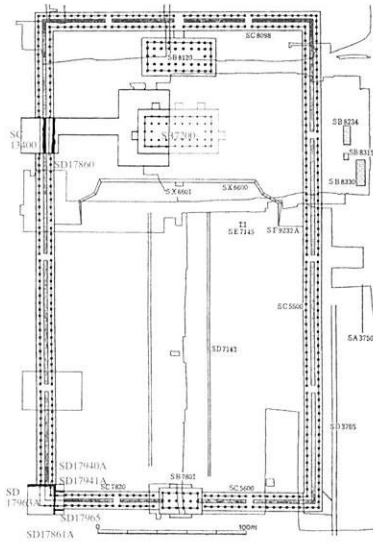
しかも両建物に雨落溝があったとすると、両雨落溝間の約15mの空間内で、約50cmのレベル差を解消しなければならない。以上から、ここにはスロープでなく擁壁のような「段差」を設けていたと考えるべきだ。

ところで、この「段差」はF期まで残存していた可能性が高い。つまり、SB17890とSA17896の柱穴はある程度の深さを持つのに対し、SA17897とSA17898の柱穴は深さ数cmと非常に浅い。これはSA17898以東では旧地表面が高い位置にあり、その西に「段差」が設けられていたが、後世に大きく削平されたことを示唆している。さらに、E期のSB17874とF期のSB17890をともに推定位置より西で検出したことに注目したい。これらが他の遺構と異なり、東脇殿と対称位置に配置できなかったのは、建てる際に「段差」をさけたためではなからうか。

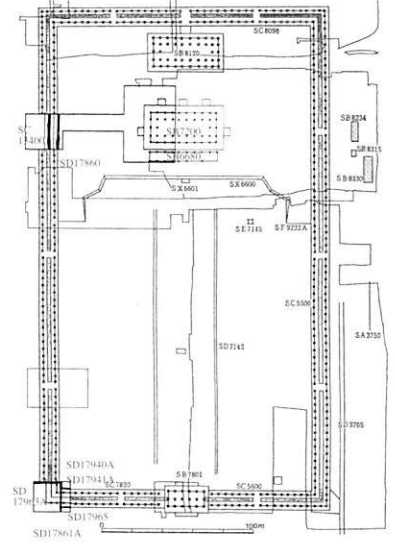
このようなことから、少なくともE・F期の旧地表面ではSB17874とSB17870の間に西に下がる「段差」があったと推定できる。これがE期造成時にはじめてつくられたか、それともA～D期にも存在したかは今後、本調査区南の発掘で説明することを期待する。(蓮沼麻衣子)

表1 時期区分比較表

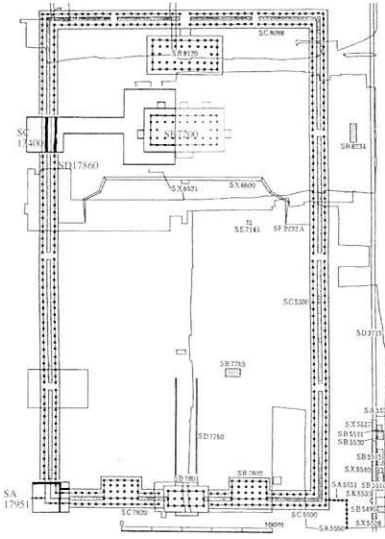
295次	296次	『平城報告 XI』
A1	a	I-1
A2	a	I-1
B1	b	I-2
B2	b	I-2
C	c	I-3
D	d	I-4
E		II
F		III
G		中世以降~



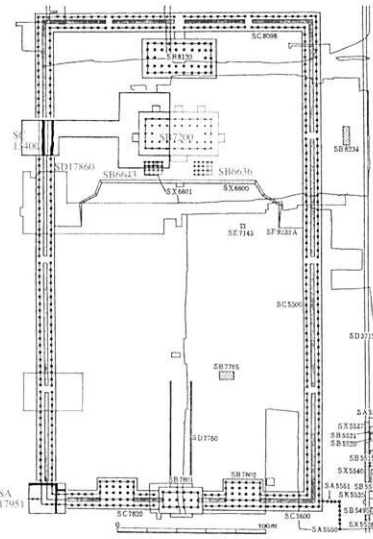
A1・a期



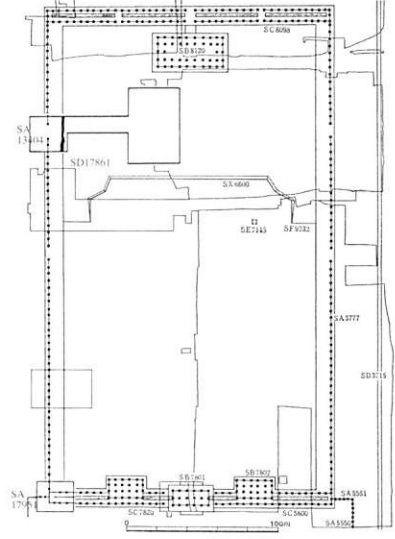
A2・a期



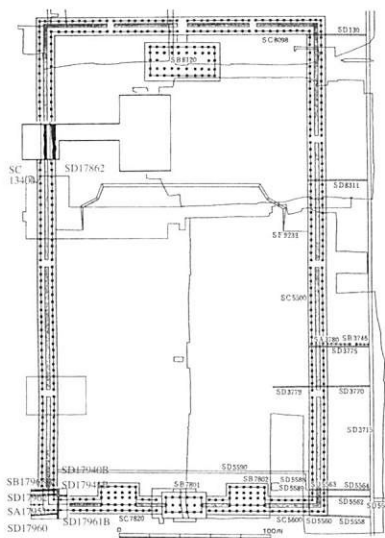
B1・b期



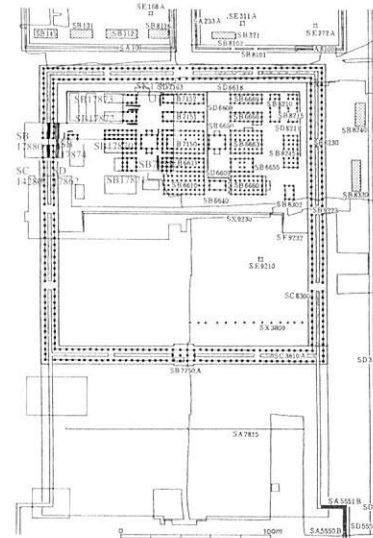
B2・b期



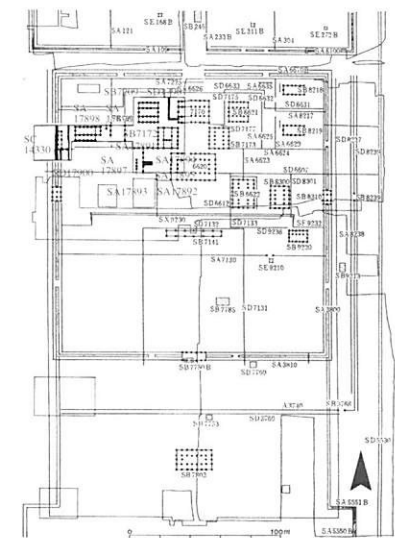
C・c期



D・d期



E期



F期

図13 第一次大極殿院 遺構変遷図 1:5000

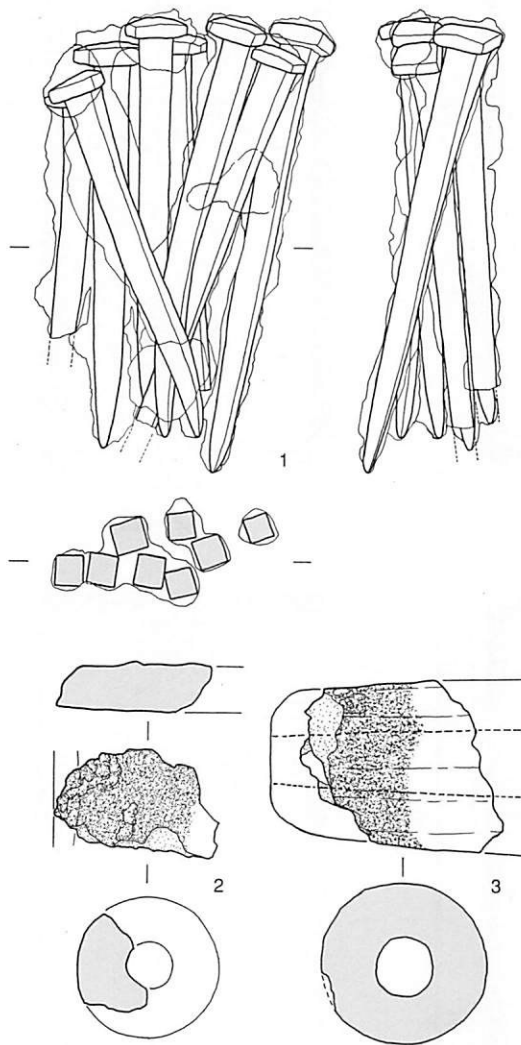


図14 第295次調査出土鉄釘・鞆羽口実測図 1:3

出土遺物

金属製品ほか

1は鉄釘。東区SB17870の南東隅柱穴抜取痕跡穴から、同一規格の角釘8本が束状に固着して出土した。基部で一辺約1.2cmの脚部に、一辺約2.2cmの頭部をつける鍛造の方頭釘である。最もよく遺存している個体の全長は18.6cm。束ねていた紐などの痕跡はみられない。曲がっている個体が含まれており、建物に使用していた釘を解体時に廃棄したものであろう。

2・3は鞆の羽口で、直線羽口の先端部周辺の破片である。胎土は礫を多く含み、黄褐色を呈する。ともに西区南東部より出土した。2は外径5.6cm、内径1.8cmに復元できる。先端は溶解しており、外面は被熱のため灰色から黒色に、内面は橙色から暗赤褐色に変色している。3は先端部を欠損している。外径6.5cm、内径2.3cm。外面は灰色、内面は橙色に変色している。(石橋茂登)

土器・土製品

瓦罇類以外の土器・土製品には、古墳時代の埴輪・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器、中世の瓦器・土師器・白磁、青磁などの輸入磁器・国産磁器、近・現代の陶磁器があるが、ここでは第Ⅱ期(『平城報告XI』)建物群の柱抜取痕跡及び西面築地回廊周辺で出土した古代の土器についてふれることにする(図15)。

第Ⅱ期建物群柱抜取痕跡出土土器 SB17870・17871・17874の柱抜取痕跡から比較的まとまって出土した。特にSB17870では、大量の瓦や燃えた木片、木炭とともに出土しており、その出土状況は、これらの土器を建物解体時に他の廃材とともに一括して投棄したことを示している。土師器と須恵器が各々の抜取痕跡から出土したが、7割以上が土師器である。土師器には杯A(3、4)、杯B蓋(1、2)、杯C(5、6)、ⅢA(7~10)、椀A(11~14)、甕A(15~18)、高杯、盤Aがあり、大小の甕A、椀A、ⅢAの出土量が目立つ。須恵器には杯A(19)、杯B(20~22)、杯B蓋(23~25)、壺A、平瓶、甕があり、食膳具である杯A・Bの出土量が大半を占める。これらの土器は、その形態や調整から平城Vと考え、SB17870は長岡京遷都後間もない頃に解体されたものと思われる。SB17871出土の遺物は少なく、甕(34)が図示できるのみである。SB17874の一カ所の柱抜取痕跡からは、土師器杯AとⅢA4点が一括して出土した(26~29)。杯A(26)はC手法で調整されるが、口縁部直下外面には削り残しが認められ、ⅢAの削りも粗く施されている。これらの土器はその特徴から平城上皇時代の平城Ⅶと考える。

西面築地回廊周辺出土土器 東雨落溝SD17862出土の土師器杯A(30)、ⅢA(31・32)を図示した。いずれも奈良時代後半。(33)は平底を呈する須恵器甕で、口縁部外面は赤褐色に発色する。愛知県猿投窯の製品。遺物包含層である暗灰色砂礫土層出土。

今回、第Ⅱ期建物群の柱抜取痕跡から出土した土器は、建物解体のような作業時に使用された食器の構成を知る手懸かりとなるものである。また、出土土器の年代から、第Ⅱ期建物群の解体には時期差のあることが推定されるようになった。その具体的な土地利用の変遷過程の解明が今後の検討課題として残される。(川越俊一)

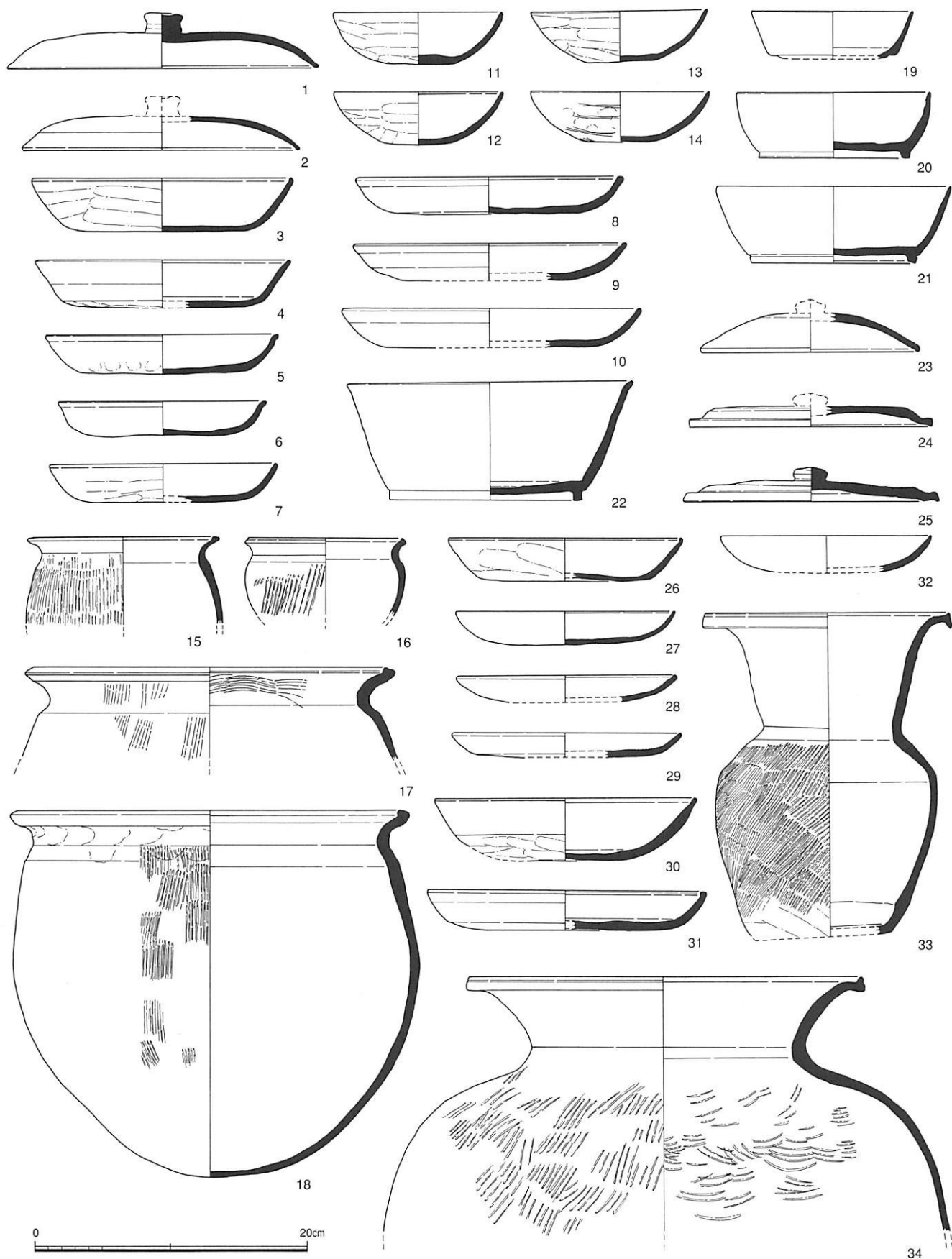


图15 第295次調査出土土器 1:4

表2 第295次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6130	B	53	6663	A	3
6131	A	1		?	1
6133	Aa	1	6664	C	9
	C	4		I	1
	?	1		M	1
6134	A	3	6665	A	2
6225	?	1	6681	B	1
6282	B	8	6682	A	1
	Ca	2	6691	A	6
	G	2	6718	A	100
6284	?	1	6721	C	5
6308	B	1		?	1
	C	1	6732	A	4
6314	A	1		C	2
型式不明		61		O	2
近世		1	型式不明		50
			現代		1
軒丸瓦計		142	軒平瓦計		190
	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他
重量	270.4kg	687.8kg	48.5kg	60.7kg	鬼瓦 1
点数	2,804	8,135	80	40	面戸瓦 5
					隅切平 1
					刻印丸「理」 1

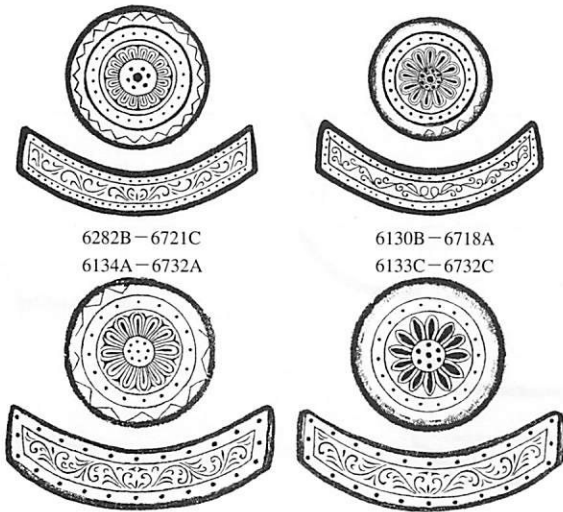


図16 第Ⅱ期殿舎の軒瓦

瓦磚類

従来の調査で、第一次大極殿院地区での軒瓦の組合せの大まかな変遷は、6284-6664、6313-6685→6225-6663、6282-6721→6133-6732であることが判明している（『平城報告XI』）。これは平城宮軒瓦編年Ⅰ～Ⅱ期前半、Ⅱ期後半～Ⅲ期、Ⅳ期に対応する。当調査区での出土軒瓦の様相を①殿舎地区と②西面回廊地区に分けて記述し、③で問題点を述べる。

①殿舎地区 従来の調査では、瓦Ⅱ～Ⅲ期の6282-6721、瓦Ⅳ期の6133・6134-6732の組合せが主であり、大極殿SB7200に使用の6284C-6664Cが少ないのは、SB7200とともに恭仁宮に運んだためと推定している。

第295次調査区でも、瓦Ⅰ期の6284C 0点、6664C 2点、6664I・6664M・6665Aが各1点とやはり少ない。瓦Ⅱ～Ⅲ期では、6225・6308B各1点、6282B 6点、6721C 2点が、SB17870の柱抜取痕跡から出土したほか、6131A・6282 B・6282C・6282G・6308Cが各1点、6663A 3点、6663が1点、6691A 5点、6721C 1点がある。瓦Ⅳ期では、SB17870の柱抜取痕跡から、6130B 52点、6718A 97点のほか6133A 1点、6133C・6732A各3点、丸瓦218kg、平瓦435kgが出土、SB7155の柱抜取痕跡から6718A・6732A各1点が出土したほかは、6134A 3点、6732A・6732C各1点が出土したに留まる。

②西面回廊地区 東面築地回廊で殿舎地区に接する北半部分では、瓦Ⅰ期の6284C-6664C、瓦Ⅱ～Ⅲ期の6282-6721、瓦Ⅳ期の6133-6732が多かった。当調査区の西面回廊でも、瓦Ⅰ期の6284が1点、6664C 7点、6665A・6314A・6682A各1点と、殿舎地区に比して多い。瓦Ⅱ～Ⅲ期では、6282B・C・G各1点、6721が3点、6691A・6681B各1点、瓦Ⅳ期では6133C 1点、6718A 2点、6732C 1点、6732O 2点である。点数が少ないが東面回廊

と傾向は同じである。

③問題点 第Ⅱ期（『平城報告XI』）のSB17870の柱抜取痕跡から多量に出土した6130B、6718Aを、SB17870に葺いたのだろう。初めて明らかになった組合せである。この2種は、殿舎地域の他地点では7点ずつ出土しただけであるから、第Ⅱ期殿舎では建物によって軒瓦の種が異なっていたと推定する。従来、6130Bは瓦Ⅱ期後半に置いていたが（『平城報告XⅢ』）、瓦Ⅳ期に下ると見られる。

『平城報告XI』では、第Ⅱ期殿舎を飾った瓦として、瓦Ⅳ期の6133・6134-6732のみならず、瓦Ⅱ～Ⅲ期の6282-6721も挙げている。これは第Ⅱ期殿舎の建設期間が瓦Ⅱ期からⅣ期まで長期に及んだことを意味するのだろうか。『平城報告XI』での遺構変遷における、第Ⅰ-3期は恭仁宮期で瓦Ⅱ期後半、第Ⅰ-4期は平城還都～天平勝宝5年で瓦Ⅲ期、第Ⅱ期は天平勝宝5年以降で瓦Ⅲ期末以降となるが、天平勝宝5年は東楼SB7802の解体年であって、第Ⅱ期建物の実際の建設年代がどこまで下るかは、諸説があって確定していなかった。第Ⅱ期建物群の個々の建物に葺いた瓦は不明な点が多かったが、正殿SB6610・6611の柱抜取痕跡から6134・6133-6732が出ており、今調査でもSB17870の柱抜取痕跡から多量の6130B-6718Aが出土したことから、瓦Ⅳ期を主体とすると考えて良からう。そうすると殿舎地区での瓦Ⅲ期の瓦は、一段階古い瓦を第Ⅱ期造営に用いたか、第Ⅱ期でなく第Ⅰ-4期の造営に用いたかのどちらかだろう。後者とする、第Ⅰ-4期の造営は東面・西面の築地回廊の復活だけであり、殿舎地区では何も行ってないという過去の所見に照らすと、殿舎地区から一定量のⅢ期瓦が出土することが説明しにくい。還都前後から来るべき造営に備えて用意していた多量のⅢ期の瓦を、第Ⅱ期造営にも投入したと考える方がよい。

（岩永省三）

3. 第296次調査

第296次調査はいわゆる第一次大極殿を取り囲む築地回廊の西南隅部分の状況を明らかにすることを目的として、東西24m、南北20mの、480m²の調査区を設定して行った。

調査期間は1998年11月9日～1999年1月13日である。

基本層序

調査区の発掘調査前の地形は、大きく南辺部（調査区南端から北約5mまで。結論的には朝堂院部分に相当）及び西辺部（調査区西端から東約6mまで。大極殿院区画の西外側部分に相当）の一段低い逆L字形の範囲と、それ以外のやや高い部分（築地回廊基壇部分及び大極殿院広場部分に相当）からなり、奈良時代の旧状をある程度反映したものになっていた。

調査区南辺部では、上から順に整備盛土（約45cm）、耕土（約10～30cm）、黄灰色土（約5～15cm）、灰褐色土（約5～20cm）の遺物包含層があり、その下で後述の礫敷SX17944（約5～10cm、上面の標高約67.2～67.4m）を検出した。礫敷の下、青灰色粘土の地山との間に、奈良時代の整地土とみられる灰褐色または橙灰色の粘質土（0～約20cm）が残る部分もあるが、調査区南壁ではこれは失われている。

西辺部では、上から順に整備盛土（約20～60cm）、耕土（0～約40cm）、黄灰色土または礫混灰褐色土、淡茶灰砂質土などの遺物包含層（0～約40cm）、南辺から続く礫敷SX17944（約5～10cm、上面の標高約67.3～67.4m）となる。さらにその下に、奈良時代の整地土とみられる暗茶斑茶褐色土（0～5cm）、明橙灰粘質土（0～5cm）が残る部分があり、その下に青灰色粘土の地山が続く。

中央部以北の一段高い部分では、整備盛土（約35～40cm）、耕土（約5～15cm）、遺物をほとんど含まない黄灰色土または橙褐色土の層（約0～5cm）の下に、後述の礫敷SX17943（約5～15cm、上面の標高約67.9～68.0m）がある。この下で築地回廊基壇上面などを検出した。

遺構

今回の調査では、築地回廊2、掘立柱堀1、溝11、広場2、礫敷2などを検出した。

第一次大極殿院地区では、過去に1967年の第41次調査で、今回の調査地と東西対称の部分に当たる築地回廊東南隅を調査している。その成果は、大極殿院東半分全体の調査と合わせ、『平城報告XI』にまとめられている。本報告では、まず今回の調査の知見に基づいて遺構の時期変遷をおさえた上で、最後に『平城報告XI』の時期区分との対応関係を述べることにする。

a期の遺構

SC7820・SC13400 第一次大極殿院を区画する南面築地回廊SC7820と西面築地回廊SC13400である。基壇積土及び礎石痕跡6カ所を確認した。基壇南辺、西辺では、整地土及び地山を掘り込んで幅約20～35cm、深さ約10～15cmの溝を巡らして、基壇土を積む範囲を画している。基壇の断面観察によって積土の状況をみると、青灰色粘土の地山の上に、南方の朝堂院地区と一連の工程の整地土を約15～25cm敷いた上で上述の溝を掘り、その内側に現存約35～50cmの厚さで部分的に礫の入る層を交えて版築を行っていることがわかる。なお、大極殿院の西外側にも奈良時代の整地層が残るが、これと基壇部分の整地とは一連のものではない。

築地回廊東半を発掘した第41次調査や、SC13400の北延長部を発掘した第192次調査では、掘込地業を確認しているが、今回では、上述の基壇南、西辺を画する溝より内側を掘り込んでいる状況は認められない。

また、基壇外装については、SC13400の東辺の一部で、後述のd期の雨落溝SD17940Bが設けられる以前に抜き取られた痕跡を検出したのみで、他の部分では削平により確認できなかった。その他、現存基壇積土南辺部の斜面で、もともと基壇外装に用いられていた可能性のある長径約25cmの凝灰岩片を、転落した状態で検出した。

次に、礎石の状況をみると、SC7820の南側柱列3カ所、SC7820北側柱列及びSC13400東側柱列計3カ所の抜取痕跡を検出した。一部については、長径15～40cm前後の根石が入っていた。SC13400西側柱列は削平されていた。また、一部の礎石痕跡の傍らに足場穴の可能性のある小穴を検出したが、延長部が調査区外となるため、確定はできない。

つづいて規模についてみると、柱間は検出長が短いため正確には測定しがたいが、桁行約4.5m、梁間約7.0mに復元できる。現状では削平されているが、梁間の中央に



図17 SX17943 (上段)とSX17944 (下段) (南東から)

築地が想定できるので、築地の心から側柱までは約3.5mとなる。すなわち、回廊西南隅のSC7820とSC13400の交差部分では柱間約3.5mということになる。また、築地想定心から基壇南辺までは約5.2m、西辺までは約5.4mである。すなわち、基壇幅は約10.4m～10.8mと推定できる。

なお、SC7820とSC13400における築地心の交点の国土方眼座標はX=-145,461.8、Y=-18,677.5である。

今回検出した築地回廊の規模は、第41次調査で検出したものの規模とほぼ同じであることが判明した。

SD17940A a期における西面築地回廊SC13400の東雨落溝。d期に同位置につくられるSD17940Bにより破壊されているため、SD17940Bの下層に厚さ約5～15cmの堆積土が残るのみである。

SD17941A a期における南面築地回廊SC7820の北雨落溝。d期に同位置につくられるSD17941Bにより破壊されているため、SD17941Bの下層に厚さ約25cmの堆積土が残るのみである。なお、築地回廊の南、西雨落溝は削平されており検出できなかった。

SX17942A a期における大極殿院内の広場。調査区東辺、北辺に設けた断ち割りトレンチで検出した。整地土が約10～20cmの厚さで残るが、検出面は礫やバラスなどが残っており、凹凸があって平らでないため、本来の面をとどめていないと思われる。

SD17963A SD17940Aの雨水を暗渠により築地回廊SC13400の西側へ排出するための東西溝。暗渠は木樋を通していた可能性もあるが、おそらくd期に同位置につくられるSD17963Bの木樋掘形を掘る際に抜き取られており、SD17963Bの下層及び北肩に部分的に木樋を据えた際の裏込めの灰色粘土が残るのみである。



図18 第296次調査区全景 (東から)

SD17961A SD17940A、SD17941Aの雨水を暗渠により築地回廊SC7820の南側へ排出するための南北溝。暗渠は木樋であったと推定されるが、d期に同位置につくられるSD17961Bの暗渠掘削に先立って抜き取られており、SD17961Bの下層及び西肩に部分的に木樋を据えた際の裏込め土が残るのみである (図19)。

断面観察により設置の過程を復原すると、以下のようになろう。まず大極殿院で最初の基壇であろうSC7820をつくるにあたって、旧地表面を全体に地山まで掘り下げ平らにならす。ただし、この区画では、掘り込み地業はなされていない。それに続いて、地山の上に約25cmの整地を行った段階で、その面から掘り込んで木樋を据える。その後、土を埋め戻し暗渠を塞いだ後、回廊全体を覆うように基壇土を約40cm以上積んでいると考えられる。つまり、基壇上面では最初の掘形は検出できない。

SD17965 朝堂院内に東西に設置された詰石暗渠。幅約50cm、深さ約15～20cmの溝を掘り、径約5～10cmの河原石を詰めている。後述のd期の南北溝SD17961B及び東西溝SD17960により破壊されており、約3.2m分しか検出していないが、排水系統から考えて西に向かって流れていたものと考えられる。

b期の遺構

SA17951 朝堂院の北辺を画する東西の掘立柱塀。柱穴2基を検出。柱間約3.2m。地山の上に30cm以上基壇土を積んだ後、掘形を掘っている。

このほかのa期の遺構は存続したと考えられる。

c期の遺構

SA13404 大極殿院の西辺を区画する南北の掘立柱塀。SC13400を撤去した後に設けられている。SC13400

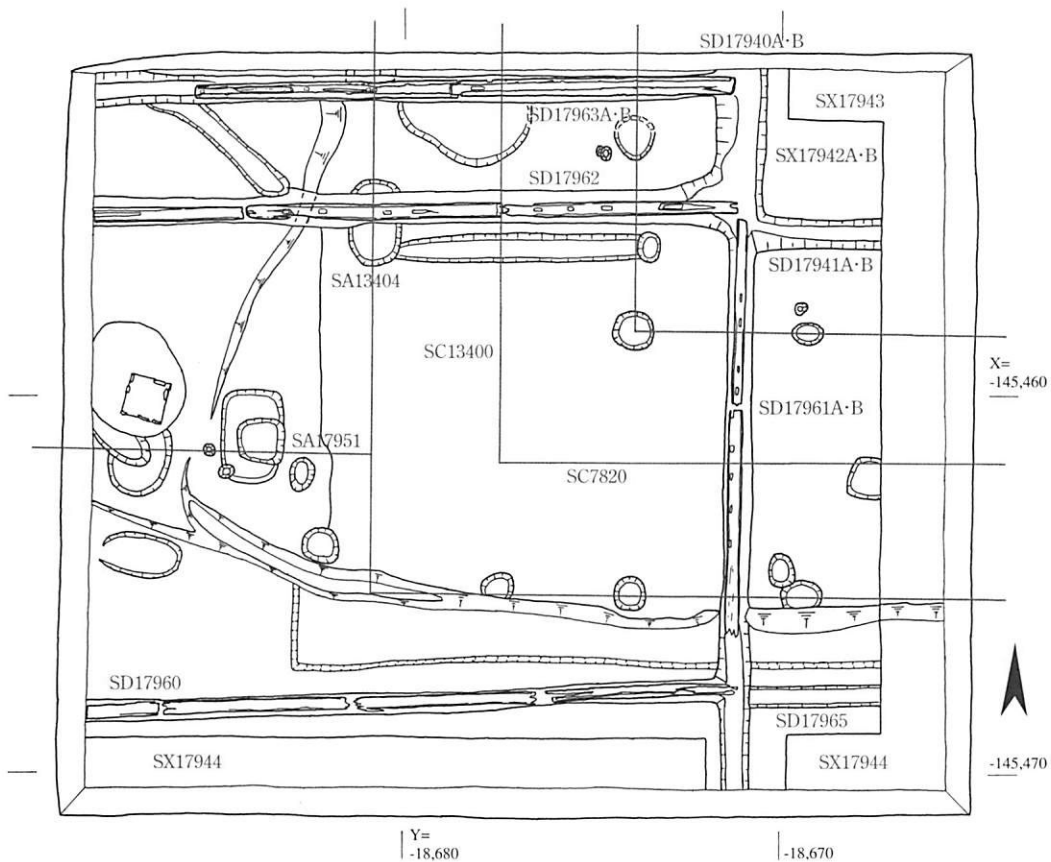


図19 第296次調査 遺構平面図 1:200

の西側柱列と筋をほぼ揃える。柱穴は2カ所検出したが、北のものは調査区外にかかり、柱間を正確には測定できなかった。南端は撤去されなかったSC7820の西端の柱に接続すると考えられる。北側の柱掘形はa・b期の東西溝SD17963Aを切り、抜き取り穴は後述するd期のSD17963Bに切られる。南側の柱穴は掘形、抜き取り穴ともにd期のSD17962に切られる。

この他、SC7820、SA17951などは存続していたと考えられる。

d期の遺構

SD17940B d期における西面築地回廊SC13400の東雨落溝。検出面での幅約1.4m、深さ約30cm。溝の東肩に径約5~10cmの河原石を並べるが、転落しているものが多い。

SD17941B d期における南面築地回廊SC7820の北雨落溝。幅約70cm、深さ約40cm。SD17940B同様、溝の北肩に径約5~10cmの河原石が小口を揃えて一列に並べられており、ほぼ全て原位置を保っているとみられる。

SX17942B d期における大極殿院内の広場。SX17942Aの上に約20~25cmの土を積み、その上に0.5~1.0cmの厚

さで径0.3~1.0cm程度の非常に細かい石を敷きつめている。この石は人工的に細かく砕いた小石であり、溝肩に並べられた石列で画されている。上面の標高は約67.6mである。大極殿院広場の景観を復原するのに重要な知見が得られた。

SD17940B、SD17941B、SX17942Bの上には瓦が約5~15cmの厚さで堆積していた。これは築地回廊を最終的に解体した際に投棄されたものであろう。この瓦堆積は下にいくほど完形のを多く含む傾向にある。軒瓦の詳細は後に譲るが、面戸瓦や鬘斗瓦が一定数出土しており注目される。上層は前述の礫敷SX17943に覆われる際、意図的に細かく打ち砕いて平らにならした跡が読み取れる。SX17943が第一次大極殿院築地回廊南辺部の廃絶とそう隔たらない時期のものであることを示している。

SD17963B SD17940Bの雨水を西へ排出するための溝。基壇下を木樋暗渠で貫くが、基壇の西外側は木樋がないことと、砂が詰まった土の状況から開渠とみられる。SD17940A埋土、SA13404柱抜き取り穴を切ってSC13400基壇上面から掘り込み、SD17963Aの木樋を抜き取った後に新たに木樋を据え、埋め戻している。木樋を据える際

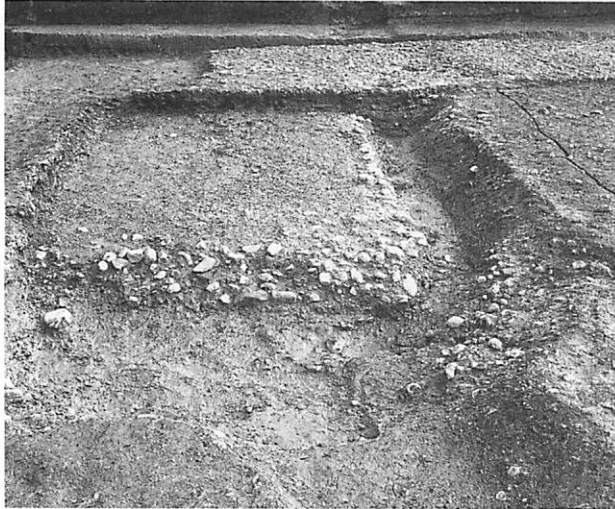


図20 SX17942B (東から)

に、木樋全体を灰色粘土で包んだ状況が確認できる。木樋は断面円形の材を断面逆台形に削り抜き、蓋をしているが、蓋板は一部のみ残存し、大部分は腐食して失われていた。2本の材を用い、東側の材の西端を西側の材に印籠継ぎ状に差し込んでいる。材の法量は、東から長さ7.3m、径40cm、長さ6.9m、径40cmである。樹種はコウヤマキと思われる。東西両端及び継ぎ目部分では木樋の沈下防止のため、下に径15~20cm程度の河原石を敷いている。また、東西両端部では各2枚の板を一对打ち込んで、木樋がずれることを防いでいる。取水口である木樋東端では、樋内にも1mの範囲にわたって径5~15cm大の河原石を詰め、水を濾している。木樋には、蓋板を載せる棧をはめ込むための抉りが施されている。なお、この木樋には多数の柄穴があり、それをことごとく埋木で塞いでいる。これは第41次調査で検出したSD5563の暗渠に用いられていた木樋とほぼ同じ形態である。二本とも一方の端から2m程のところまで身が細まっているところがあり、その部分がもともと立てられていた時の地上に出ている部分と掘形に埋まっていた部分の境と考えられる。柄穴の状況も考え合わせると、掘立柱塼の柱を転用したものであろう。おそらくc期のものを再利用したと考えられるが、それ以前の履歴を持っていた可能性が高い。

SD17962 SD17940BとSD17941Bの雨水を西へ排出するための溝。基壇下及び基壇西外側を木樋暗渠で貫く。SD17940A堆積土、SA13404柱抜き穴を切って、SC13400基壇上面から掘込み、木樋を据え、埋め戻してい

る。これも木樋は灰色の粘土で包まれている。SC13400の西側では明澄灰粘質土の整地層で覆われており、上から検出することはできない。木樋は断面矩形に材を削り抜き、外形もある程度四角く整え、上から蓋をしている。蓋板は一部のみ残存するが、SD17963Bの木樋に比べてやせ細っている。3本の材を継いでいるが、材の長さは東から6.4m、6.7m、一番西のものは調査区外へ延びており、全長を計測できない。幅はそれぞれ35cmである。樹種はコウヤマキと思われる。これにも柄穴が残っており、転用材であろう。ただし柄穴には埋木をせず、精良な粘土を充填している。なお、断ち割ってみたが、暗渠の掘り直しの痕は確認できなかった。溝埋土から須恵器杯Aがほぼ完形で出土した。

SD17963BとSD17962を比較すると、勾配は前者が急で、木樋の形状や石敷の有無も異なることから、同様の機能を持つことを考慮すると、時期が微妙にずれると考えられる。しかし、重複関係や出土遺物からは前後はあきらかにできない。

SD17961B SD17940B及びSD17941Bの雨水を南へ排出するための溝。基壇下を木樋暗渠で貫くが、朝堂院部分では開渠とみられる。SD17941Aの堆積土を切ってSC7820の基壇上面から掘込み、SD17961Aの暗渠を抜き取り、灰色粘土で包んだ木樋を据えている(図18)。木樋は断面箱形に材を削り抜いて用いている。蓋板は残っていない。2本の材を継いでいるが、北から長6.0m幅40cm、長4.8m幅30cmである。樹種はコウヤマキ。これにも木樋転用以前にあげられた柄穴があり、埋木を用いず粘土を詰めている状況が確認できる。

暗渠南端付近に一括投棄された状態で軒瓦がまとまって出土している。また、ほぼその位置に暗渠埋土を切って土坑SK17945が掘られており、中から土師器壺が伏せた状態で出土している。

SD17960 朝堂院内にあって、SD17961からT字に分岐し、西へ排水するための溝。基本的にはSD17965の詰石暗渠をSD17961より西側で踏襲しているが、軸線はややずれている。木樋暗渠であり、地山を掘込むが、整地層で覆われているため、本来は上から検出できない。木樋は外形も樋断面も箱形に加工し、他の木樋とは異なった形態を持つが、残りは悪い。現状で4本を継いでいる。東から現存の長さ5.0m、4.9m、5.0mであり、西端のも

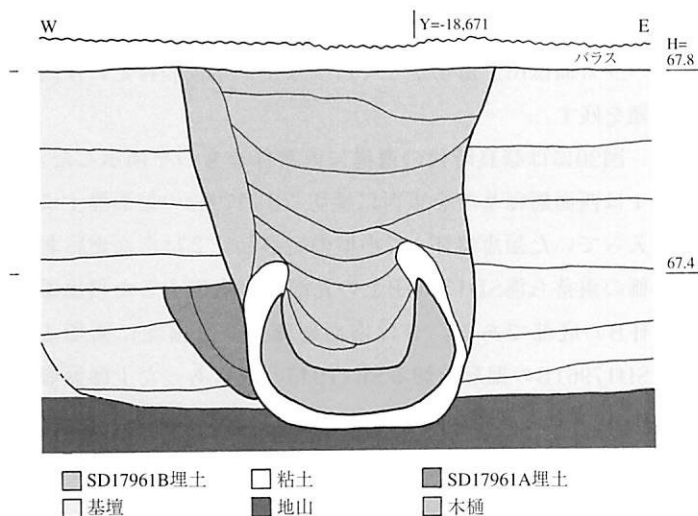


図21 SD17961A・B 断面図 1:15



図22 SD17961B・SD17962 (北東から)

のは調査区外へ延びているため計測できない。幅はそれぞれ現存30~35cm。樹種はヒノキ。朝堂院の西辺を画する塀の外側まで暗渠は続いているのだろう。

e期の遺構

SX17943 この地区の施設を全て撤去した後に敷き詰めた礫敷。瓦器など中世遺物を含まないので、中世までは下らないであろう。前述のSX17942B上に堆積した瓦溜の層との関係を見ると、瓦溜の上層がSX17943に覆われる際に意図的に細かく打ち砕いて平らに均していたあとが読み取れる。瓦溜とSX17943の間には、別の層をほとんどはさんでいない。また、SX17943の礫層の中から出土した軒瓦をみると、平城宮出土軒丸瓦編年Ⅰ~Ⅱ期のものに限られ、それより新しいものを含んでいない。これらのことから、SX17943はd期の築地回廊解体とそう隔たらない時期のものであることが推定できる。

f期の遺構

SX17944 調査区南辺部及び西辺部で、SX17943を切って一段下がった部分に敷き詰めた礫敷。これにはSX17943に比べて大量の平城宮瓦が混ぜられており、石の大きさもやや大きい。全体に粗い仕事になっているように観察できる。上面で瓦器を見出しており、中世以降のものと思われる。なお、この調査区西端にある井戸は近現代のものである。

遺構小結

以上、今回の調査区の中での重複関係の知見に基づいて、築地回廊など第一次大極殿院西南隅の区画施設が存続していた時期の遺構をa~dの4期に、これが解体された後の遺構をe・fの2期に分けて述べた。

a期が築地回廊が造られた時期、b期が朝堂院を画する掘立柱塀がつけられる時期、c期が西面築地回廊が撤去され、掘立柱塀に建て替えられる時期、d期が西面掘立柱塀を撤去し、築地回廊基壇雨落溝や基壇を貫く暗渠を作り直す時期とすることができる。これを過去の第一次大極殿院の調査から導かれた『平城報告Ⅺ』の時期区分と対応させてみるならば、a期がⅠ-期、b期がⅠ-2期、c期がⅠ-3期、d期がⅠ-4期に相当すると考えられる。但し、大極殿院東半の調査の知見では、Ⅰ-4期に西面掘立柱塀SA13404に対応する東面掘立柱塀SA3777を撤去した後に東面築地回廊SC5500が再建されたことが判明しているが、今回の調査区ではd期における西面築地回廊の痕跡は確認できなかった。また、Ⅱ期については、朝堂院北辺掘立柱塀の、SA17951に対応するSA5551Aが抜き取られた後、築地塀SA5551Bに建て替えられたことが判明しているが、今回の調査区ではSA17951の抜き取り穴を検出したのみで、築地の痕跡は削平されており、確認できなかった。

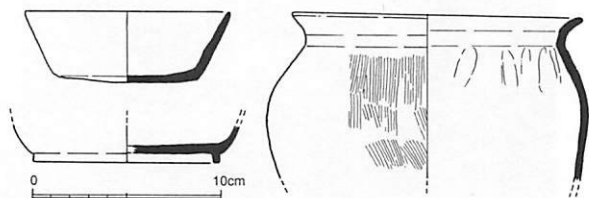


図23 第296次調査 出土土器 1:4

なお、今回の調査のe・f期については礫敷にともなう遺物は少なく、その性格も不明であり、暦年代を明らかにする手がかりも得られなかった。このため、『平城報告XI』で述べられたⅡ期以降の遺構との対応関係も明らかでなく、こうした点の解明は他日を期したい。

次に、遺構の平面的位置関係について今回の調査と第41次調査の築地回廊東南隅の調査とを比較したい。東面回廊SC5500と、西面回廊SC13400は、大極殿院南門SB7801の心を軸にほぼ正確に東西対称の位置関係にあることがわかる。また、東南隅におけるI-1期の排水溝SD5556・5565はそれぞれ今回の調査におけるSD17961A・17965に対応し、I-4期において多数つくられる排水溝についても、東南隅のSD5563・5562・5561・5560はそれぞれSD17963B・17962・17961B・17960に対応する。但し、SD17961Bが南へ延びるのに対し、SD5561は東折してSD5560になるなどの違いはある。以上のことから考えて、第一次大極殿院南面においては、築地回廊のみならず、排水施設についても東西対称を強く意識して造営されていたことが確認できる。(古尾谷知浩)

出土遺物

木製品・石製品

木製品は、遺構の項で述べた暗渠の木樋のほか、SD17963Bの調査区西端開渠部分の堆積層から、造営の際に木材を加工する時にできたと思われる木片が多数出土した。石製品は、礫敷SX17944の上面から弥生時代サヌカイト製の石鏃が1点出土した。

土器

発掘区全体で出土した土器の総量は遺物整理用テナ2箱に満たない。それには埴輪、土師器、須恵器、青磁、瓦器、中近世以降の陶磁器などがある。上下2段のバラス面より上位の土や井戸の掘形からは近現代の遺物

が出土しているが、下のバラス面では13、14世紀頃の瓦器皿、土師器羽釜片が出土しており、バラスによる整地の下限がその頃であることを示している。ただし、上段のバラス面は出土遺物がとくに少なく、年代の特定には問題を残す。

図20には奈良時代の遺構に直接伴うものを図示した。1は西面廻廊基壇を東西に横切るSD17962の掘形埋土に入っていた須恵器杯Aで小型の完形品。2は南面廻廊北側の雨落ち溝SD17941B上の瓦溜りから出土した須恵器杯Bの底部である。3は南面廻廊基壇を南北に横切るSD17961Bの掘形を切るSK17945の底にあった土師器壺B。いずれも厳密な時期比定は難しい遺物であるが、回廊の年代に齟齬するものではない。(高橋克壽)

瓦埴類

今回の調査で出土した瓦埴類は別表の如くである。量的には大極殿院広場SX17942Bの上に投棄された瓦溜りのものが多い。軒瓦にして20点を数えるが、特に平城宮出土軒瓦編年I-1期の軒丸瓦6284A・Cが5点、軒平瓦6664Cが7点と目立つ。これらは第一次大極殿院地区創建に際して用いられていたものが、築地回廊解体に際して投棄されたのであろう。

また、SD17961Bの木樋暗渠部分南端付近の埋土から同じく平城宮出土軒瓦編年I-1期の軒瓦が5点まとまって出土した(軒丸瓦6284Aが2点、6284Fが1点、軒平瓦6664Cが2点)。これらも第一次大極殿院地区創建に際して用いられていたものが、木樋暗渠の改修時に埋土と一緒に投棄されたものであろう。(古尾谷)

表3 第296次調査出土瓦埴類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6133	A	2	6664	C	12
	B	1	6665	A	1
6225	L	1	6685	B	1
6284	A	7	型式不明		8
	C	4			
	F	1			
	?	1			
6304	C	1			
6311	Aa	1			
型式不明		14			
軒丸瓦計		33	軒平瓦計		22
	丸瓦	平瓦	埴	凝灰岩	道具瓦他
重量	243.7kg	746.1kg	17.5kg	0.1kg	面戸瓦 65
点数	2,724	8,108	10	1	甃斗瓦 17
					道具瓦 11

4. 結び

第295次調査で得た知見としては、(1) 大極殿の北面西階段・西面階段を含めた基壇西北部を検出し、基壇の規模を確定したこと、(2) 西面築地回廊を推定心より西に約60cmずれて検出し、あわせて東雨落溝、および創建当初のバラス敷きも検出したこと、(3) E・F期の西脇殿の様相が把握できたことの3点が挙げられる。

(1)は二重基壇で南面中央階段を3基から幅38尺の中央階段1基とするなど、階段部分を含めた基壇形状の復原に少なからず影響を及ぼした。(2)に関して、第192・296次調査では東面築地回廊からの推定位置どおりに検出したのに対し、北の第217次調査では多少西に振れる。したがって、さらに北の第295次調査で大きく西に振れたと考えられなくもない。しかし一方で、第295次西区南半で検出した幅の広いA～D期の東雨落溝を第217次調査区では検出していない。以上のことから、この溝が第295次調査区と第217次調査区の間で築地回廊を横断し、その南北と築地心がずれる可能性が出てきた。これらの問題解明は今後の調査結果を待ちたい。

また、大極殿から回廊・磚積擁壁までの敷地造成に関して、E・F期にはSB17870とSB17874の間に段差があることが推測できたが、これが大極殿創建当初までさかのぼって存在したかは現時点ではわからない。この問題も、敷地全体を復原する上で、今後の調査を踏まえてさらに検討を加えねばならないであろう。

一方、第296次調査で得た知見は、(1)築地回廊西南隅の基壇や一部の礎石の位置を明らかにしたこと、(2)大極殿院内の水を排出するための暗渠などの施設を明らかにしたこと、(3)大極殿広場の小礫敷を良好な状態で検出したことなどである。(1)(2)では大極殿院南面の東西対称性や、従来の時期区分の妥当性を再確認することができたが、築地回廊の復原に対して他の調査区との結果を踏まえたさらなる検討の必要性も指摘した。また、(1)(3)についても、将来の大極殿院全体の敷地造成や復原を考える上で、地盤高を含めた重要な情報を提供した。

以上のように、今回の調査で、第一次大極殿はもちろん、第一次大極殿院地区における奈良時代、平安時代初期の遺構や敷地造成を把握する上で、重要な資料と問題を提示できたと考える。(蓮沼・古尾谷)

平 城 専 ころむ 欄 ①

◆ことしの現場班

3人が転出、新たに4人がメンバーとなりました。班の顔ぶれも変わり、刺激の強い現場が多かったようです。春は、早速新人が研修に登場。真の新人I氏は黙々と、新人というにはためらいもある(失礼)T氏は持ち前のバイタリティを発揮、他調査員を圧倒してバリバリと調査を切り盛りしました(本人は大分遠慮したそうですが…)。夏はH氏が研究所初の女性総担当者で登場。現場や遺物整理の作業員みなさんに心配されつつも、研修から連続参加のI氏が堂々従え、長い調査を乗り切りました。秋は食欲の秋にふさわしく、現場近くの食堂で、一食千円以内でいかに質・量共に優れた好きな料理?を食べるか競われ、一部調査員の間で話題となりました。このコスト感覚が今後研究や生活にいかされるのでしょうか?冬は中規模現場の連続。調査員が分散し、休憩時間恒例トランプもあまりできなかったようです。整理棟の横なので時々自主参加していた人間もみましたが…(私です)。景気よく出た昨年に比べ、木簡の出土が皆無で、少し寂しい一年でした。ここでも不況ですか? (K)

考古第1	井上 和人	夏	石橋 茂登
考古第2	金田 明大		川越 俊一
考古第3	清野 孝之		岩永 省三
遺 構	浅川 滋男	春	蓮沼麻衣子
計測修景	平澤 毅		内田 和伸
史 料	渡邊 晃宏	冬	舘野 和己
	次山 淳	秋	加藤 真二
	高橋 克壽		玉田 芳英
	山崎 信二		千田 剛道
	西山 和宏		箱崎 和久
	高妻 洋成		高瀬 要一
	古尾谷知浩		山下信一郎

色付きは総担当者